

# 豆狸の寝言

副会長 三原幸二

夏になると楽しみが一つ増えます。アイスクャンデーです。

昭和十二年に生まれ、育ち盛りに食べ物の不自由さを身にしめて感じた私にとって、戦後すぐのころ、和歌山県すさみにあった母親の実家で食べたアイスクャンデーのうまかったこと。家の前で大人たちが脱穀をしているとき、アイスクャンデー屋が自転車に乗って売りに来たのを買ってもらったのですが、もみ殻だらけの中庭で、おばあちゃんやおふくろと一緒に食べたアイスクャンデーは、甘いのか甘くないのかわからないような味でしたが、いまもうれしい味として口の中に残っています。

あれから六十二年。酒も煙草もやめてしまった私に残された楽しみは、食べることです。ものの豊富さ、手に入りやすさは、少年時代を思うと夢のようですが、それでも、心躍るのはアイスクャンデーです。

子供たちが巣立って家内と二人。隙間が大きくなった冷蔵庫には、夏になると常にアイスクャンデーがおさまっています。家内が折々に551の蓬萊のを十本まとめて買ってくれるのですが、ミルク、金時、宇治金時がどっさり入っているのを、風呂上りに、今日はどれを…と選んでいるときのうれしさ、ぜいたくさ。そして、残り一本になったときの心細さ。

こないだも、残り一本になって心細かったので、難波神社であっ



た夏祭りの帰りに、百貨店の地下売り場に寄りました。例の三種類を合わせて二十本買うと、

「ミルク、金時、宇治金時はおじいちゃん・おばあちゃんの定番、ベストスリーです」若い男の店員がいう。

「へえ、そう。わたしにぴったりだ」

「いや、お客さんは若いからおじさんですよ」

「七十。高校生の孫もいるから、おじいちゃん」

言うと店員、驚いた顔をしていましたが、なんだか縁日をひやかしているような気分になったのも、アイスクャンデーだったからかもしれません。

(アイスクャンデー)